

漢詩人としての漱石と子規への一考察

——二首の「鴻台」詩を中心に——

博士後期課程国文学専攻一年

徐

前

漱石と子規にとっては、漢詩文はその文芸の主流ではない。しかし、漱石も子規も幼い頃から漢詩文に親しんでいた。漢詩文は彼らの文芸の出発点と基礎、即ち原点というべきものである。

二人はともに中国古典から深い影響を受け、漢文の素養を持ち、生来詩人的素質に恵まれている。しかも、漱石の漢詩を作る意欲は子規の刺激を受けて初めて出てきたと言われている。若い頃の二人は漢詩の応酬により交遊していた親友同士でもある。しかし、漱石と子規の作った漢詩作品は同じ趣旨のものもあれば、違った志向などを示すものも少なくない。それは二人の会おう前の作品からも窺うことができる。

明治二十九年を境に漢詩の世界を去った子規の多作に対して、漱石は生涯漢詩を作っていたにも拘わらず、作品数が少ない。特に、少年期の作品は殆ど残っていない。ところが、明治十六年頃、まだ面識のない漱石と子規は、偶然に同じ「鴻台」を題にした漢詩作品を作っている。

「鴻台」は千葉県市川市にあり、天文七年（一五三八年）と永禄七年（一五六四年）に北条氏と里見氏親子二代とが合戦

を行った古戦場国府台の雅称である。古戦場の隣に曹洞宗の総寧寺がある。漱石が何時鴻台に行ったかはよく分からないが、江戸生まれの彼にとっては、行きたければ何時でもすぐ行けるところだから、記録に残っていないのであろう。一方、子規が明治十六年九月六日に竹村鍛宛に送った手紙に「小生ハ先日鴻之台に遊び候」と書いているのを見ると、子規の鴻台行は、明治十六年六月、初めて上京してからまもなくのことであると分かる。まだ少年期の作品で、漢詩の代表作ではないものの、二つの作品を並べて見ると、両者の違った志向はこの時期から、既に現れているのではないかと思われるので、ここに取り上げて考察を加えてみたい。

一、漱石の「鴻台」詩

二松学舎大学図書館で発見された漱石在学中の明治十四年における「詩文課題」の一覧表によると、毎月五日、十五日、二十五日の三回、詩と文との課題が出されていた。これにより推測すれば、在学中の一年間、漱石は少なくとも数十首の漢詩習作を成したことがあるはずである。しかし、この少年期の習作は、今のところまだ見つからない。少年時代の詩友奥田必堂の手により、文芸雑誌『時運』（明治三十九年六月十五日）の漢詩欄に「枕雲眠霞山房主人」の雅号で発表された「鴻台」をはじめとする八首は、松岡讓氏によって発見されたいわゆる漱石の最古の漢詩作である。松岡讓氏の解題によると、それは「漱石を名乗る遙か以前のものです、（中略）多分、明治十六年か十七年、十七、八歳の少作」で、漱石の漢詩の「よき助産婦役をつとめた」子規はまだ「彼の前に現れていない」時期の作品である。漱石の「鴻台」詩は次の二首からなる。

其一

鴻臺冒曉訪禪扉

孤磬沈沈斷續微

一叩一推人不答

驚鴉掠亂掠門飛

其の一

鴻台 曉を冒して 禪扉を訪う

孤磬 沈沈 断続して微かなり

一叩 一推 人答えず

驚鴉 掠乱 門を掠めて飛ぶ

夜明けが近づく古寺、人氣なくひっそりとした空間、とぎれながら微かに聞こえる磬の音、門を掠めて飛びたつ驚いた鴉、この光景からは一種の禅的な寂寥を感じさせられる。払曉の暗闇の中に外界を感受するのは聴覚によるものが多いから、静かな夜明け前の磬の音は人々に深い印象を与えるものである。それは夜の侘びしさと古寺の静けさとを際立たせるばかりではなく、また夜の深遠と禅の神秘とを語っている。しかも、この「鴻台」詩には、言葉の使用から詩の題材、境地に至るまで、中国古典文学の濃厚な投影が見られる。それは漱石の中国詩画に対する高い教養によるものとしか考えられない。中国の往古の詩人達は寺の「鐘磬音」に対して特別な愛着を持っている。例えば、唐の常建（紀元七〇八年〜七六五年）の代表作「破山寺の後なる禅院」に「万籟此俱寂、惟聞鐘磬音」（万籟此に俱に寂たり、惟鐘磬の音を聞くのみ）、日本によく知られている張繼（生卒年不明）の詩「楓橋夜泊」には「姑蘇城外寒山寺、夜半鐘声到客船」（姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘声客船に到る）という句がある。漱石の詩にはこれらの詩と共通する雰囲気が漂っていると感じられる。ともに昔から広く愛誦されてきた名句であるから、「余、児たりし時、唐宋の数千言を誦し、喜んで文章を作為る」（『木屑録』明治二十二年十月）という漱石がこれらの詩を読んでいないとは考えられない。また、唐の詩人賈島（紀元七七九年〜八四三年）の詩「李凝の幽居に題す」の「僧敲月下門」（僧は推す月下の門）を連想させる。賈島がこの句に「推」と「敲」

のどちらを用いるかで夢中だったという話は中国詩壇の佳話として伝えられてきた。漱石が「一叩一推」を使ったのは恐らくその故事を知っていたからである。しかし、ここでは「一叩一推」は単に言葉のあやに止まるものではなく、門外に立っている作者の小心翼翼の姿を際立たせる意図もある。即ち、この「一叩一推」によって、初めて禅門を敲く作者の心境を表出したいのである。

其二

高刹聳天無一物

高刹 天に聳えて 一物無く

伽藍半破長松鬱

伽藍 半ば破れて 長松鬱たり

當年遺跡有誰探

當年の遺跡 誰有りてか探らん

蛛網何心床古佛

蛛網 何の心ぞ 古仏を床とす

其の二

淋しげに聳え立っている仏塔、半ば崩れた御堂、鬱蒼たる老松、人氣のない境内、静かに巢作りをしている蜘蛛、詩の全体は寂寥と感傷の色に染められている。昔、勢いよく合戦を行った古戦場であったが、今、残されたのは半ば荒廃した古寺だけである。歲月の流れによってすべては去っていったが、荒涼としても禅の世界はまだ残っている。鴻台にある総寧寺は明治維新以後、本堂などはかなり衰微していたから、ここでは「伽藍半破」と詠んだ。作者はこの風景を通して自分の心に潜めている何かを語ろうとしている。中国では、寺院などを題材にして詠んだ詩や詞が多く見られる。詩境に禅の入ったのは唐の時代からで、当時その意図の見られる作品はなお数少ないが、既に現れていた。例えば、白居易（七十二年（八四六年））の詩「江樓夜、元九律詩を吟じ韻を成す」にある「神鬼聞如泣、魚龍聽似禪」（神鬼聞いて泣くが如く、

魚竜聴いて禅に似たり、錢起（七三二年～七八〇年）の「僧の日本に帰るを送る」の「水月通禪寂、魚龍聴梵声」（水月禪寂に通じ、魚竜梵声を聴かん）などがそれにあたる。この風潮は宋の時代に盛んとなり、かつ明確に禅思、禅境を以て詩境を比喻し、しかも禅の思想の観点で詩歌に対して批評を加えるようになった。

漱石の二首の「鴻台」を合わせて映像化してみると、夜明けの前に、小心翼翼として寺門を叩く作者の姿がはっきりと浮かんでくる。寺門（禅門）を叩いてみた。ところが、返事が返ってこない。そこで心が乱れた。もう一度寺をよく眺め窺える。即ち、現実から逃げようとするから、禅門を叩いた。しかし、人がいないか、いても答えてくれないかはよく分からないが、いずれにしても寺門（禅門）の前で拒否された。そこで、辺り一面の荒涼に面して、思わず「蛛網何心床古佛」と問を發した。ここでは、網をかけて古仏を牀にした蜘蛛の行動は古仏を無視している失敬か、禅牀を作って古仏を参拝しようとする禅心かと、その心情を推し量る作者の目的は禅に向かって進むか、後退かという自分の気持ちを確かめようとすることにあったのではなからうか。ここでは、第一首の禅境の神秘から第二首の禅境の荒涼への移りは作者の心境の変化でもあるように思われる。即ち、禅に拒否された前と後、作者の目に映った違った風景は単純の映像ではなく、心境の変化をも語っている。あたり一面の荒涼、蜘蛛の行動、向こうの世界も未知のものばかりである。作者の躊躇が隠しきれない。入り乱れて門を掠めて飛んで行く驚いたカラスは、まさに漱石のこの乱れた心の表出である。ここでは、「驚鴉」の示唆を看過してはいけない。

まだ習作期に当たる作品は未熟でありながら、詩境から見ても、典故の応用から見ても立派な出来栄で、詩人としての素質を立派に備えていると思われる。第一首の神秘と寂寥、第二首の荒涼と感傷、少年漱石が禅の世界から得た最初のイメージは、生涯漱石の作品に生き続けている。漢詩ばかりでなく、小説も俳句も同じである。例えば、初期短編『趣味の

遺伝』には「余が寂光院の門を潜って得た情緒は、浮世を歩む年齢が逆行して父母未生以前に溯ったと思う位、古い、物寂びた、憐れの多い、捕えるほど確とした痕跡もなきまで、淡く消極的な情緒である」と書いてある。また、『こころ』の主人公である「先生」の周りにも終始寂寥の空氣が漂っている。そして、「一定の時刻に超然としてきて、また超然と帰って行った」という「先生」の姿も俗世から離れた世界に繋がっているように思われる。

二、子規の「鴻台」詩

漢詩の創作にかけては、子規の方が漱石に比べて先輩格で、十二歳から既に漢詩を創り始めたのである。そのため、まだ習作期にあたる漱石と違って、子規は「鴻台」詩を書いた頃、既に数百首以上の漢詩を詠んでいた。明治十六年六月の上京を境に、子規の漢詩は第一期から第二期へ進んだ。この明治十六、七年は子規の漢詩の多作期で、それぞれ六十七首、八十六首ある。「鴻台」詩は子規が「衣錦何時歸國路、重過海岸最高樓」⁽¹⁾（錦を衣て何れの時か帰国の路、重ねて過らん海岸最高の樓）という夢を抱いて、上京してからまもなくの作である。

游鴻臺

鴻の台に遊ぶ

総接武処有鴻臺

総の武に接する処 鴻台有り

百仞丘陵碧崔嵬

百仞の丘陵 碧 崔嵬たり

遠控荏城近刀水

遠くは荏城を控へ 近くは刀水

曠田平野濶然開

曠田平野 闊然として開く

憶昔北條事攻伐

憶ふ 昔 北条 攻伐を事とし

里氏孤軍據城壘

里氏孤軍 城壘に拠りき

先登衝之者爲誰

先登して 之を衝きし者 誰とか爲す

姓鴻名某一勇士

姓は鴻 名は某なる一勇士

江流滔々勢吞山

江流滔々 勢 山を呑み

叱咤躍馬亂奔水

叱咤 馬を躍らして 奔水を乱る

馬腹噴珠水有聲

馬腹 珠を噴いて 水に声有り

揮將隻手摧孤城

揮ふに隻手を將して 孤城を摧く

千歲悠悠人知少

千歲悠々 人知ること少に

只餘英名附地名

只 英名を余して 地名に附するのみ

城閣無迹禾空秀

城閣迹無く 禾 空しく秀で

唯見山河猶仍舊

唯見る 山河 猶旧に仍るを

疑聽當年吶喊聲

当年吶喊の声を聴くかと疑へば

鐘淵波碎萬雷吼

鐘ヶ淵 波碎けて 万雷吼ゆるなり

ここでは、作者が「叱咤躍馬亂奔水」「馬腹噴珠水有聲」を以て古戦場の一場面を再現させ、戦争の凄まじさと英雄の勇ましさを描き出すと同時に、「城閣無迹禾空秀 唯見山河猶仍舊」の句により、悠々たる歲月の流れの中で、自然だけが不朽であることに感嘆し、切ない虚しさを感じさせる。また、「疑聽當年吶喊聲 鐘淵波碎萬雷吼」などの句から、自ら虚構

した心象世界に陶醉している作者の心境を窺うことができる。その規模の大きさと措辞の力強さは漢詩でなくては表現できないもので、とても少年期の作品とは思われないものである。

この「鴻台」が鴻という勇士を記念するため名付けた地名であるという記録はどこにも見あたらない。中国の古地理書『三輔黄圖』三、長樂宮に「鴻臺、秦始皇二十七年築、高四十丈、上起觀宇、帝嘗射飛鴻於臺上、故号鴻臺」（鴻台、秦の始皇帝二十七年に築く。高さ四十丈、上に觀宇を起す。帝嘗て飛鴻を台上に射する。故に鴻台と号す）という記録が見られる。しかし、日本の「鴻台」という雅称の由来はそれと関係しているかどうかは不明である。これは子規が上京してからもなく作った作品で、恐らく史実を離れて自らの想像に任せて詠んだものであろう。漢の許慎の『説文解字』によると、「鴻」即ち鴻鵠で、常に英雄の喩えとして使う。『史記』『陳涉世家』に、「陳涉少時、嘗與人傭耕、輟耕之壟上、悵悵久之、曰、苟富貴無相忘、傭者笑而應曰、若爲傭耕、何富貴也、陳涉太息曰、嗟乎、燕雀安知鴻鵠之志哉」（陳涉少き時、嘗て人と與に傭耕す。耕を輟めて壟上に之き、悵悵することを久しうし、曰く、「苟く富貴なりとも、相忘るること無からん」と。傭者笑って應へて曰く、「若、傭耕を爲す、何ぞ富貴ならんや」と。陳涉太息して曰く、「嗟乎、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と。）と記載されるように、「鴻鵠の志」は英雄豪傑の志をいう。また、『通志』『氏族略、以名為氏』によると、「鴻氏、大鴻氏之後也、大鴻、即黃帝、亦謂帝鴻氏」（鴻氏は、大鴻氏之後なり、大鴻は、即ち黃帝、亦た帝鴻氏を謂ふ）である。そう考えると、ここでは、「鴻鵠の志」を抱いて「雄飛」を焦っている地方士族出身の子規が「鴻」という文字を借りて、心の中にいる勇士に苗字をつけたのは一種の仮託であらう。この「鴻台」詩には作者自身の移入が見られ、その鴻氏の勇士は子規の自画像でもあるように思われる。人々に注目されていないが、この時期の子規の野心がよく窺える一首であると言えよう。同じ明治十六年の作品には、同じく古戦場を偲び、谷干城の西南の役の功績を詠んだ「谷少將熊本籠城図」という別の一首も見られる。それは絵を見て詠んだもので、「鴻台」詩のような実景に即したものではな

い。これらの漢詩作品には合戦の熱戦ぶりと英雄の「吞山」の勢いがよく現れ、英雄崇拜に傾く少年の心理が窺われる。

三、二首の『鴻台』詩に見られる相違

この二首の「鴻台」詩を比較して見ると、下掲の対照表が示しているように、幾つかの相違が見られる。

	漱石	子規
詩形	七言絶句二首	七言古詩(十八句)
出发点	習作期	習作期から成熟期へ
創作の材料	夜明け前の古寺	古戦場の遺跡
創作の動機	禅的な世界への憧憬	英雄への崇拜
着目点	禅や俗世離れという非人情の世界	英雄や功名という人情の世界
潜在意識	俗世からの脱出(消極的)	社会参与の意欲(積極的)
境地の創出	中国の唐宋詩人に似た趣(静)	スケールの雄大さ(動)
創作の目的	現実から離れた世界を感得しようとする	虚構の世界を現実化しようとする

漱石の詩は二首の七言絶句、子規は十八句の七言古詩で、詩形から見れば異なるが、同じ所を訪ねて詠んだ作である。漱石がこの時期に詠んだ漢詩は「鴻台」をはじめとする八首しか発見されていない。その中に七絶が五首、七律が一首、五絶が二首ある。すでに百首以上詠んでいた子規のこの頃の作品は各種の詩形を作っている。両者の「鴻台」詩は共に十

六、七才の作品であるとはいえ、子規の漢詩は既に成熟期を迎えたのに、漱石の漢詩創作はまだ習作期を出ない。子規の「鴻台」詩は古戦場をテーマにし、大きいスケールにより英雄の勇しさを描きだしたもので、まるで映像と物語を重ねた絵巻物のような一場面を創った。

それに対して、漱石の「鴻台」詩は仏寺をテーマにし、深遠な境地と絃外の音を感じさせられる。習作らしい小心翼翼とした類型的な処も見られるが、心境の描写、典故の活用、雰囲気の出などから見ても、漱石の「鴻台」詩は子規に劣ると思わない。それは、漱石という人は元来学問的頭脳に恵まれ、生得の詩人的な素質を持っていたからである。そのほかに、漢籍の知識に負うところも多いと思われる。

「考へて見ると漢籍許り読んでこの文明開化の中に漢学者になった処が仕方なし⁽²⁾」と、将来の進路に不安を感じ始めた漱石は明治十五年夏ごろ二松学舎を退学して、明治十六年に神田駿河台の成立学舎に入学、漢文の代わりに英語の勉強に目を向け始めた。それは嘗て漢詩文が好き、「文を以て身を立つるに意有り⁽³⁾」の漱石にとっては、いうまでもなく人生の一つの重要な転換点に違いない。

他方、政治への関心がますます強まり、「今日の開化世界に出て、天下の人に駕軼せんとする」という野心を抱いて、「功名は天下衆人の相争ふて得んと欲する所なり 私共も亦此一大競争場に入て試に一鞭を加へ天下萬人と後先を争はんと欲するなり⁽⁴⁾」と宣言した子規も、「功名心」実現のため、この年に上京して須田学舎に入り、のち共立学校に入学したことから人生の新しい旅立ちをした。

同じく人生の新しい出発点に立った二人の少年の作品には、各自それぞれの本質を表していると思われる。それは内実がまったく違うものである。両者の分岐点はまず着目した景趣にある。同じく鴻台に立って、漱石の目に入っただのは禅的な閑寂の世界である。作者は視線を終始「禅扉、高刹、伽藍、古仏」から離すことができなかった。それに対して、子規

の視線は古戦場に向いている。作者は「鴻」という一文字を借りて、自らの心象世界を虚構した。ともに歳月の流れに深く感嘆しているが、漱石の「伽藍半破」という荒涼に対して、子規は英雄の「千歳悠々人知少」を詠んだ。小心翼翼禅門を叩いている漱石は心で現実から離れた世界を感じようとするのに、英雄の勇ましさを描いている子規は自ら創った虚構の世界を現実化しようとする。禅の世界に惹かれたのは常に現実からの脱出を望んでいるからである。それに反して、英雄への崇拜は常に社会参与の意欲に伴っている。そこには漱石の厭世観の消極的一面と子規の社会参与の積極的一面とが反映していると同時に、漱石の躊躇と子規の自信を読み取ることもできる。

四、漱石の「禅」と子規の「志」

「鴻台」詩は漱石が禅世界に惹かれた心境の最初の表出であると思われる。その後、禅世界に拒否されながらも、漱石は禅門を敲き続けていた。「鴻台」詩に窺える俗世界から脱出したいという態度は生涯変わらないものである。そのため、漱石の漢詩には禅に関する詩や句が多く見られる。それは漱石の作品を読めばよく分かる。例えば、漱石の漢詩には初期「山僧日高猶未起、落葉不掃白雲堆」（山僧日高くして猶お未だ起きず、落葉掃わず白雲堆し）、中期「来宿山中寺、更加老衲衣、寂然禪夢底、窓外白雲歸」（来たり宿る山中の寺、更に加う老衲の衣、寂然たる禪夢の底、窓外白雲歸る）、晚期「借問参禪寒衲子、翠嵐何處着塵埃」（借問す参禪の寒衲子、翠嵐何れの処にか塵埃を着けん）などがあり、俳句にも「夜三更僧去って梅の月夜かな」「鶏頭の黄色は淋し常楽寺」「名月や杉に更けたる東大寺」という句が見られる。更に、明治二十二年、子規の『七草集』をきっかけに再び漢詩を作り出した時、次の一首がある。

洗盡塵懷忘我物

塵懷を洗い尽くして 我と物とを忘れ

只看窓外古松鬱

只だ看る 窓外 古松鬱たるを

乾坤深夜闌無聲

乾坤 深夜 闌として声無く

默坐空房如古佛

空房に默坐して 古仏の如し

「鴻台」詩の其二と同じく、入声五物の韻字「物・鬱・佛」を用い、しかも鬱蒼たる古松、ひっそりとした夜、人気のない空間などの風景も、どこか感傷をもらした心境も、よく似かよう七言絶句である。それは偶然の一致であるか、それとも「鴻台」詩を念頭に置いて詠んだものであるかはよく分からないが、例え偶然の一致だとしても、少なくとも漱石はつねに「伽藍」「古仏」などを意識していたことが証明できるであろう。詩境から見れば、己も世事も忘れ、無我の境地となったこの一首は、「鴻台」詩の荒涼を超えた段階に達したと思われる。即ち、嘗て禅の門前に彷徨った作者は遂に禅の世界に向かつて一步踏み出したといえよう。また、漱石の初期短編集『漾虚集』にも「鴻台」詩に似た「古伽藍と剥げた額、化銀杏と動かぬ松」（『趣味の遺伝』より）、「蓮の葉に蜘蛛下りけり香を焚く」（『一夜』より）という描写が見られる。漱石の小説にもその禅門を敲き続けた軌跡が残っている。「自分は門を開けてもらいに来た。けれども門番は扉の向側にいて、敲いても遂に顔さえ出してくれなかった」という『門』の主人公宗助に対する描写にもそれが窺えるであろう。

これらの詩句からは、明治二十七年、漱石の鎌倉円覚寺での座禅を連想させられる。内心の葛藤で一番苦しかった時の漱石は、参禅によりこの俗世から抜け出そうとしたに違いない。しかし、この参禅は失敗に終わってしまった。漱石が小説『門』に、宗助の参禅の失敗に対して、「彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもって生まれて来たものらしかった。それは是非もなかった。けれども、どうせ通れない門なら、わざわざ其所まで辿り付くのが矛盾であった。彼は後を顧みた。

そうして到底また元の路へ引き返す勇気を有たなかった。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時までも展望を遮っていた。彼は門を通る人ではなかった。また門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」と書いた。だから、宗助は「又十日前に潜った山門を出た」より仕方がなかった。それは漱石自身の参禅の経験談にもなるといえよう。結局、「私の様なものには到底悟は開かれさうに有りません」と、漱石は道に入ることができず、抱えている問題は何も解決できなかった。それにもかかわらず、漱石は生涯、特に晩年、禅の世界に深い関心を示し、「無他愛竹三更韻、與衆栽松百丈禪」（他無し竹を愛す三更の韻、衆の与に松を栽う百丈の禅）という禅の心を持っていた。「禅」は漱石詩の生涯のテーマの一つと言えよう。『明暗』時代の一連の七言律詩には「道書誰點窟前燭、法偈難磨石面苔」（道書誰か点ず窟前の燭、法偈磨し難し石面の苔）、「香烟一炷道心濃、趺坐何處古佛逢」（香烟一炷道心濃、趺坐何處古佛逢）（香烟一炷道心濃く、趺坐何れの処にか古仏に逢わん）、「道到虚明長語絶、烟歸暖燄妙香傳」（道は虚明に到りて長語絶え、烟は暖燄に歸して妙香伝う）などの聯が見られ、「禅」の投影がかなり濃厚である。これらの晩年の詩に見られる、真実を求め続け遂に忘我の境地になって自然に溶け込んでいってしまう無我・無心という境界は、漱石が最終的に求めた「則天去私」の世界に繋がっているのではないであろうか。漱石自身は「道到無心天自合」（道無心に到らば天自ら合し）という詩句で「則天去私」と同趣旨の思想を示した。小宮豊隆氏は「漱石が晩年に志した道の修業は、禅の修業とは言へなかったとしても、少くとも多分に禅的な要素を持つてゐるのである」⁽⁵⁾と述べている。即ち、

俗世への失望を抱えて禅門を敲いた

←

禅門を潜って中の世界を覗きたい

← 拒否されて禅門を出る

← 現実世界と禅世界の間に彷徨う

← 再び禅門を敲く

← またも拒否された

← それでも求め続ける

← 禅で自己を完成させる

← 則天去私に達する

のように、漱石の漢詩には終始禅を求め続けていた。その軌跡はこの「鴻台」詩までに遡ることができる。漱石の漢詩はまさに禅の世界から始まり、禅の世界を以て終わるかのように見える。この意味では「鴻台」詩は漱石の禅思想、しかも人生そのものを考察するのに非常に重要な意味を持っていると思う。

漱石の禅の世界を求め、俗世から退避したいという態度は現実社会への不満に発し、これを底流にしている。『草枕』の冒頭には「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」と書いており、その厭世観は明白なものである。漱石はなぜ少年期からこんな消極的な態度を持っていたのか、彼の早熟と現実に対する嫌悪は、幼い頃の恵まれなかった家庭環境に直接に関係していると考えられる。父母と養父母との間を行ったり来たりしていた漱石は、家庭に望んでいた愛情が得られなかった。幼い心に宿った暗い陰は少年漱石に早くも人間不信と現実嫌悪の念を生じさせ、しかもこれは一生彼の心から去ることはなかった。それは漢詩に現れるだけでなく、彼の小説創作、思想、個人生活にも深く影響していると思われる。『行人』の一郎にしても、『こころ』の先生にしても、漱石の小説の主人公達は殆ど厭世的な孤独者である。それは、唯一の自伝に近い小説『道草』の主人公である健三と同じく、愛に恵まれない幼年生活、極度の精神衰弱、洋行の不愉快による発狂に近い状態、修善寺大患、養父母との摩擦など、幼児の時から不幸な境遇に置かれた漱石の生涯は殆どあらゆる局面が危機の深淵に直面していたからである。彼の人生は他人にも伝えられない孤独と狂気に至る葛藤に纏わられていた。それでも、漱石は自我の実現への追求を終始放棄しなかった。そこから始めて漱石の小説が誕生した。現実の世界で自らの小説の主人公達と一緒に苦闘して疲れた漱石は、台湾の学者である鄭清茂氏がいうように、「悲観的な現実の生活の中で、時折、大空を眺めたり、大自然を静観したり、精神的な桃源郷の世界を渴望したりして、暫時解脱を求め⁽⁶⁾」ているのである。

一方、違った幼年生活を送った子規の人生観はまったく違ったものであったと考えられる。子規は、少年時代から社会参与の積極的意欲を見せている。初期随筆『筆まか勢』第一編の「演説の効能」には「余は在郷の頃明治十五、六年の二年は何も学問せず、只政談演説の如きものをなして愉快となしたることあり」という記録が見られ、少年子規の政治への意欲を窺うことができる。『鴻台』詩にもこの意欲的なものが読み取れると思う。また、少年子規の漢詩は題詠、題画とも

に同じく詠史の作品が多く見られる。例えば、日本史に取材した「太田道灌」「菅原道真」「詠史 北条時頼」、中国の《三国志》の英雄を詠んだもの「曹孟徳」「趙雲」「周瑜」「徐庶」「孫仲謀」などばかりでなく、更にアメリカの「華盛頓（ワシントン）」を詠んだものもある。それはただ歴史に対する関心だけではなく、この「鴻台」詩と同じく子規の英雄崇拜の一面を物語っている。子規の漢詩には、短歌、俳句、散文にもまして、この英雄崇拜を伴う社会参与への意欲がよく現れている。子規の初期漢詩作品にしても、社会参与の意欲に伴っている青雲の志が到る所に見られる。明治十五年八月二十九日の友人三並良への書簡には次の一首が見られる。

今日神國果如何

今日の神国 果して如何

萬民未誦擊壤歌

萬民未だ 擊壤の歌を誦せず

經世濟俗其莫侮

經世濟俗 其れ侮るなかれ

容易難越人海波

容易に 人海の波を越え難し

吾生奮發欲有為

吾生奮發して 為す有らんと欲す

只恨光陰夢中過

只だ恨む 光陰夢中に過ぐるを

追思往事憶後事

往事を追思して 後事を憶う

一夜凭几暗愁多

一夜几に凭りて 暗愁多し

假令道義全掃地

假ひ道義 全く地を掃うとも

無由遊說學孟軻

遊說孟軻に学ぶに由無し

獨愁事業不如意

獨り愁う 事業の不如意なるを

終宵扼腕空長嗟
欲報國家未高飛
収翼猶在南海涯
不省斯身才智短
漫欲死後芳名加
又歎神國累卵危
回首四面皆妖魔
為國為民輕我身
何厭一劍斬兩頭蛇
生來苟得益家國
何願九原作閻羅
衆庶如此可服歐米
何況鷄林與中華
若令世界萬國民
親睦宛然如一家
吾等書生又何云
況好血雨與劍花

終宵腕を扼して 空しく長嗟す
國家に報いんと欲して 未だ高飛せず
翼を収め 猶ほ南海の涯にあり
斯の身の才智の短きを省みず
漫りに欲す 死後の芳名の加わらんこと
又た歎く 神國累卵の危きを
首を回らせば 四面皆妖魔なり
國の爲民の爲 我身を輕んず
何ぞ厭わん 一劍兩頭の蛇を斬らんこと
生來苟くも 家國に益するを得れば
何ぞ願ふ 九原に閻羅と作るを
衆庶此くの如き 歐米服すべく
何況んや 鷄林と中華と
若し 世界萬國の民をして
親睦すること 宛然として一家の如くんば
吾等書生 又た何をか云わん
況んや 血雨と劍花を好むをや

平声五歌の韻字「何・歌・波・過・多・軻・魔・羅」と平声六麻の韻字「嗟・涯・加・蛇・華・家・花」を用いた七言古詩である。子規の手紙によると、これは前年の『朝野新聞』⁽⁷⁾に載った「鳥尾中將中村敬宇錦原桑者三君唱和の作」⁽⁸⁾を読み、「真に傑作」と感心し、「羨仰に堪へず遂に之に和せんと欲」して、そして長編で「盡險韻甚だ難し」韻字の少ないのを覚悟し「千辛萬苦」を経て、遂に仕上げたかなりの力作である。少年子規にとっては得意作のようであるが、芸術性から見れば平凡で、特に優れていると思われない。それは子規がこれを「漢詩稿」に収録していない原因であろう。しかし、この詩に溢れている少年子規の「志」は驚くべきものである。奮發して早く有為の士になりたい、光陰が夢中で流れていくことさえも悔しがる一刻を争う少年の心は、南宋の民族英雄、金族の侵略に抵抗するため、必死に戦っていた一代の名將岳飛の詞「滿江紅」⁽⁹⁾の句「莫等閑、白了少年頭、空悲切」(等閑に少年の頭を白了して 空しく悲切せしむる莫れ)を連想させる。岳飛は詩人ではないが、彼の「滿江紅」は壮大で軒昂たる気概と愛国の激情とが満ち溢れて、比類のない優れた詩歌であり、中国では多くの人に愛誦されている。「青雲の志」を抱いていた子規も恐らく「白了少年頭」の「空悲切」を味わいたくないため、「僻郷」で有為になりたくて雄飛を焦っていたのだろう。この詩から推察される少年子規の「吾生奮發欲有為、只恨光陰夢中過」という抱負と野心、「欲報國家未高飛、收翼猶在南海涯」という雄心とそれが実現できない苛立ち、「不省斯身才智短、漫欲死後芳名加」という功名への執着、「又歎神國累卵危、回首四面皆妖魔」という憂国の志及び「為國為民輕我身、何厭一劍斬兩頭蛇」という国と民のためには全てを犠牲にすることを惜しまない心は並大抵なものではない。この頃の子規は自由民権思想の影響を受け、政界への夢を自身の生きがい、十九才の春、哲学者志望に転ずるまで、暫くその野心を燃やしていたといわれている。上記の同じ書簡には、また「羨君決志翔萬里、愧我區々僻郷憂」(羨やむ君が決志して萬里に翔び、愧ずらくは我が区々たる僻郷の憂むを)という他一首が見られ、東京にいる友人への羨望の念と「雄飛」を焦っている自らの気持ちを表出した。「今時日を空しく松山に費して一年間に一寸の智識を得んよりは

寧ろ一年の時日を東京に費して一尺の智識を取らん事私の希望する所」で、「嗚呼光陰を如何せん日子を如何せん松山に一日の日子を消輝せば東京も亦一日二十四時間を経過せり」と、「田舎の微々たる学校」⁽¹⁰⁾での暮らしは、抱負が大きい少年子規にとっては既に我慢の限度に達したのである。そして、遂に「松山中学只虚名、地少良師從孰聴」⁽¹¹⁾（松山中学只だ虚名、地良師少なく孰に従ってか聴かん）と退学し、「僻郷」である松山を後にして上京した。

子規は野心家である。政治でも文学でも何に対しても野心を持っている。ここではさらに、子規が明治二十一年に詠んだ一首に注目したいと思う。

戲贈山櫻生生呼余以馬骨生者也 置韻

戯れに山桜生に贈る 生は余を呼ぶに馬骨生を以てする者なり

老驥伏櫪無人顧

老驥 櫪に伏して 人の顧みる無く

君愛山櫻花滿林

君は愛す 山桜 花 林に満つるを

纔見繁枝粉粧艷

纔かに見る 繁枝 粉粧艷やかなるを

焉知一雨落紅深

焉んぞ知らん 一雨 落紅深きを

羸蹄他日走千里

羸蹄 他日 千里を走り

枯骨有時直百金

枯骨 時有りて 百金に直す

只為塞翁福成禍

只 塞翁 福の禍と成りしが為に

北風垂首獨傷心

北風に首を垂れて 独り心を傷ましむ

「老驥伏櫪」「羸蹄他日走千里、枯骨有時直百金」の句はすぐ中国の魏の武帝曹操（紀元一五五年～二三〇年）の樂府「龜

雖壽」を連想させる。曹操は後漢末天下の多事なるに乗じて、雄才を發揮し、權謀を弄して、丞相となり、死後諡して武皇帝とよばれた人物であり、從軍の間にも沈鬱雄大の詩を多く作り、建安時代の代表的な詩人の一人でもある。正史の『三國志』は曹操を「非常の人、超世の傑というべし」と評している。その樂府「步出夏門行」の「龜雖壽」は次の通りである。

神龜雖壽 猶有竟時

神龜は壽なりと雖も 猶ほ竟るの時有り

騰蛇成霧 終爲土灰

騰蛇は霧を成せども 終に土灰と爲る

老驥伏櫪 志在千里

老驥櫪に伏しても 志 千里にあり

烈士暮年 壯心不已

烈士暮年に 壯心已まず

盈縮之期 不獨在天

盈縮の期は 獨り天のみに在らず

養怡之福 可得永年

養怡の福は 永年を得べし

幸甚至哉 歌以詠志

幸甚だ至れる哉 歌うて以て志を詠ず

どんな時でも、壯心を抱く氣概を失うことなく、自らの人生を生き抜く。中国では、この詩にある「老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已」という詩句は誰でも知っているほどの名句で、曹操の遠大な抱負と大きな野心がよく現れている作品である。一人の詩人というだけでなく、政治家と軍事家とを兼ねた曹操だからこそ詠まれるものである。作詩の環境は大きく違っているといっても、同じくわが志を詠んでいる子規の詩に見られる「老驥伏櫪」「羸蹄他日走千里」は曹操の詩とまったく関係がないとは到底考えられない。従って、子規がこの詩を詠んだとき、曹操詩を相当意識していたと思われる。病弱で「羸蹄」「枯骨」になり、いま曹操のように戦場に馳駆して功名を立てることができなくても、まだ何時か「走

千里」の希望を抱いている。少年時代から政治に志を抱き、功名心に溢れていた子規の野心を明瞭に読み取ることが出来る。しかも、この「走千里」という野心は、子規の短い一生の全ての行動に繋がっているように見える。しかし、やはり病弱の子規だから、思わず「纔見繁枝粉粧艶、焉知一雨落紅深」「只為塞翁福成禍、北風垂首獨傷心」という嘆息を洩らしたが、明治三十一年に作った短歌に見られる「定めなき世は塞翁が馬なれや我病ひありて歌学び得つ」のように、子規は定めない世と無常なる人生に対する自分の無力さを感じながら、「我病ひありて歌学び得つ」ことで素直に喜んで、病気に負けない姿勢を整えることができた。

漢詩ばかりでなく、女子教育の必要や内務省の牛乳取締令を論じるなど、子規の生命の燃え尽きる直前の記録である『病牀六尺』からもまた社会への強い関心を窺うことができる。更に子規は自らの行動によってその社会参与の意欲を示した。明治二十八年に、子規は不治の痼疾ある身を以て、日本新聞社や医師の反対を押し切って、従軍記者の希望を貫徹したのである。子規が友人の五百木良三への手紙(明治二十八年二月二十八日付け)には「皆に止められ候へども雄飛の心難抑終に出発と定まり候。生来希有の快事に候」と書いて、「欲報国家」の念願がついに実現しようとする喜びを告げた。さらに、

小生今迄にて最も嬉しきもの

初めて東京へ出発と定まりし時

初めて従軍と定まりし時

の二度に候。此上に尚望むべきこと二事あり候。

洋行と定まりし時

意中の人を得し時

の喜びいかならむ。前者或は望むべし、後者は全く望みなし。遺憾々々。

と、胸中を訴えた。少年子規の「鴻台」詩に見られる英雄志向がこのような社会参与の意欲により実証された。このように子規の「志」はいつも功名に繋がっているように見えるのである。従軍した子規はまもなく講和の成立により帰途に付いたが、船中で再び咯血し、帰国してからすぐ県立神戸病院に入院した。その後、「大聯湾」「鰻頭山」「老虎尾」「金州」「三崎山」「山東会館」「旅順港」等一連の従軍に関する詩を作った。その中「旅順港」は四十句の五言古詩で、子規の意気込みを込めた力作である。この従軍行動とこれらの詩作から子規の「欲報国家」という壮心を読み取ることができる。一般的に言えば、子規の詩には、客観的に事物の実景、実況を詠んだものが多く、「子規の漢詩理解は、いちじるしく叙景に傾き、述志には関心が薄かったと言わざるをえない」（小室善弘「子規の漢詩―叙景と述志をめぐって」）といわれている。しかし、初期または明治二十年前後の子規の漢詩には上記の述志的な、または「鴻台」のような雄心を潜めている述志の作品がかなり見られるのは事実である。子規の若年の漢詩作品が述志の方向に傾いているのもごく自然のものであると頷かれる。

こうして、まだ面識のない漱石と子規は偶然同時期に同所で同題の漢詩を詠んでいる。それが二人の本質を鋭く表している。

参考文献

- 講談社版 『子規全集』第八卷・第十卷・第十八卷・第二十二卷・別巻一
松岡 譲 『漱石の漢詩』 (十字屋版 昭和21・9)
小宮豊隆 『夏目漱石』(全三集) (岩波書店 昭和45・3)
和田利雄 『子規と漱石』 (めるくまーる社 51・8)

- 佐古純一郎『漱石詩集全釈』
 齊藤順二『夏目漱石漢詩考』
 飯田利行『海棠花 子規漢詩と漱石』
 清水房雄『子規漢詩の周辺』
 鄭清茂『中国文学在日本』
 大塚三郎『最後の漱石詩』
 米田利昭『子規と漱石——風景に立つ二人』
 小室善弘『子規の漢詩 叙景と述志をめぐって』
- (二松学舎大学出版部 昭和58・10)
 (教育出版センター 昭和59・8)
 (柏書房 平成3・10)
 (明治書院 平成8・4)
 (純文学出版社 一九八一・十)
 (二松学舎「人文論叢」17 昭和55)
 (「日本文学」昭和59・11)
 (国文学 解釈と鑑賞 平成2・2)

〔注〕

- (1) 講談社『子規全集 第八卷 漢詩・新体詩』漢詩稿一七一「神戸港」(明治十六)。初出「東海紀行」初案 詩稿33。
 (2) 岩波書店『漱石全集 第十六卷』「談話 落第」。初出「中学世界」(明治三十九、六、二〇)。
 (3) 岩波書店『漱石全集 第十八卷』「木屑録」(明治二十一、十)
 (4) 明治十六・二・十三 叔父加藤恒忠宛書簡参照。
 (5) 小宮豊隆著『夏目漱石』二四 参禅 (岩波書店 昭和四十五・三)
 (6) 鄭清茂著『中国文学在日本』(純文学出版社 一九八一・十)
 (7) 『朝野新聞』 日刊。明治七年九月二十四日『公文通誌』(一八七二年創刊)を改題して発行された東京の日刊紙。当代一流の文人成島柳北、末広鉄腸の主宰によって人気を呼び、政論新聞中随一の発行部数を誇った。後、両者の死と退社により、衰退の一端をたどる。明治二十六年十二月廃刊する。同名の新聞がその後も出ている。
 (8) 鳥尾中将中村敬字錦原桑者三君唱和の作 (『朝野新聞』明治十四年四月八日・四月十日)

寄中村敬字先生

鳥尾得庵

敬字先生今如何 思君遠寄莫哀歌 人生是豈非大夢 世事亦宜付烟波 天邊難留金鳥跡 戸隙誰繫白駒過
 有酒可飲書可燬 一身何堪愁緒多 莫言學道日三省 魯叟求仁遂軒軻 莫言秋潦時一到 河伯入海空嘆嗟

修身以俟果何用 蝶飛栩栩夢生涯 春風吹面人已老 秋雨沾衣齡漸加 年々歳々觀苦境 雨雨風風伴愁魔
名利從來難擲棄 一劍須斷兩頭蛇 真耶夢耶爲君說 恰似飛矢過新羅 諸君默識言外意 畢竟文字是空華
若吾憐意君來叩 春蘭浪華城南家 此間風物吾豈吝 携手共賞芳山花

次鳥尾君韻

中村敬宇

嗚呼今日乾坤果如何 悲嘆中宵起悲歌 物論喧騰如亂蛙 人情險惡似駭波 日清之事我所憂 頃刻片晷難忘過
人道韓範坐廊廟 吾儕不用杞憂多 雖然吾性偏憂國 不憂 身困輶軻 若使二邦用干戈 後來結果可深嗟
蚌鷸相持利漁人 螭蟬捕蟬悲生涯 我恐北方伏猛虎 磨爪伺隙凶威加 治國只當守理直 遂過飾非是妖魔
更苦庸人自擾事 妄鞭草萊走虺蛇 又有好戰以求利 怒目炯炯活閻羅 吾知流傳多謬說 或似病眼現空華
願得吾憂歸妄想 二邦和親如一家 東風三月春駘盪 與君同看洛陽花

余欽慕得庵居士久矣、而未接馨咳、頃訪中村敬宇翁、

翁見示居士唱和之什、感吟之餘、叨汚瑤礎以呈

錦原桑者

安石不出奈蒼生何 志士慷慨又悲歌 得庵居士今安石 夙以世務付烟波 一臥東山喚不起 門外謝絕高軒過
靜夜晴來真如月 獨讀般若波羅蜜多 心海清澄不起浪 何省世路有輶軻 吾儕欽慕多年此 趨陪無路空長嗟
尺素欲托南飛雁 暮雲望斷天一涯 一朝玉詩忽落手 感吟反覆情更加 元知詩法出兵法 筆陣中堂々驅妖魔
險韻布來現長城 首尾相應常山蛇 吁嗟今日廟堂物具 憾致居士無網羅 請見我邦間大國 東有魯米西中華
宜以信義相來往 四海之內如一家 此是畢竟居士任 戀々休看東山花

(9) 「滿江紅」詞牌の名。また曲牌の名。

(10) 明治十六・二・十三 叔父加藤恒忠宛書簡参照。

(11) 講談社『子規全集 第八卷 漢詩・新体詩』漢詩稿166 (明治十七)。明治十七・六・二十七 竹村鍛宛書簡参照。

(12) 「塞翁馬」 人生は禍福常なきもの故、福ありとて喜ぶに足らず、禍ありとて悲しむに足らない喩。『淮南子・人間訓』より出典。
近塞上之人、有善術者、馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、此何知乃不爲福乎。居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父
曰、此何知乃不爲禍乎。家富良馬 其子好騎 墮而折其髀 人皆弔之。其父曰、此何知乃不爲福乎。居一年、胡人大入塞。丁壯
者引弦而戰、近塞之人、死者十九。此獨以跛之故、父子相保。云々